愛知の博物館　No. 53

絵すき体験学習（和紙展示館）

小原工芸紙は和紙の原料となるコウゾの繊維を染色したものを絵の具がわりに、スポイトや玉シャクシなどを筆がわりにして、絵の模様を漉き込んでゆく和紙である。自然の色の美しさ、温かさ、作る人の心をなごませ、豊かなものにする不思議な魅力があります。伝統と技術、努力の結晶ともいえる作品は、まさに芸術というにふさわしいものです。

和紙展示館では、小原工芸紙を始め、その創始者である藤井達吉翁の作品、全国の和紙や和紙製品などを展示しています。併設する和紙工芸館では、一般の紙漉きとは一味違った小原工芸紙の「絵すき・字すき」の体験学習ができます。　（和紙展示館　学芸員　冨樫朗）

目　　次

● 平成２年度自然科学部門研修会の報告……2
● 平成２年度愛知県博物館協会美術部門研修会報告……3
● 再開された学芸懇談会について……5
● 新規加盟館紹介……6
● お知らせ……8

平成２年度
自然科学部門研修会の報告

鳳来寺山自然科学博物館　加藤貞亨

平成３年２月７日（木）午前10時から、犬山市の日本モンキーセンター内、さるの学習ひろばホールに於いて、愛知県博物館協会自然科学部門の研修会が開催されました。参加者は28名で自然科学系の博物館関係者の他に人文系ならびに愛知県教育委員会の後援も得て県内の中・高等学校の教員の方々も出席され多彩な顔ぶれの研修となりました。

今回で第２回目となる自然科学部門の研修は以下の様な日程で実施されました。

9：30～10：00　受付
10：00～10：05　開会挨拶　愛知県博物館協会
会長　亀井誠治氏
モンキーセンター
園長　小寺重孝氏
10：05～11：35　「愛知県内の哺乳動物の問題を考える～特にニホンザル、ネズミ類について～」
講師　金森正臣氏（愛知教育大学教授）
11：35～12：00　質疑応答
12：00～13：00　昼食
13：00～14：30　「博物館の調査活動における市民参加～平塚市カエル調査を例として～」
講師　浜口哲一氏（平塚市博物館学芸員）
14：30～15：00　質疑応答
15：00～16：00　園内見学

今回は講演の内容が調査活動の具体的事例がテーマに含まれており非常に関心を持って参加しました。

金森正臣氏の講演は、愛知県内に生息する哺乳動物について、特に先生の研究テーマとしているネズミを中心として、近年問題となっているニホンザル、イノシシ、ハクビシンなどなど36種類におよぶ動物の調査状況や採集、飼育体験など豊富な経験をとおしての具体的な発表でした。

これらの動物は一般に有害鳥獣の対象にされているものが多く、たとえばネズミやモグラ類についていえば畑作物の根を切ったりする被害をだしている一方で、畑の健全度をはかる指標動物ともいえるということでした。化学肥料の多用でミミズ等の住めなくなった畑にはモグラもいない、いわば死んだ畑であるという見方もできるわけであると。また、イノシシ、ニホンザルなどによる農作物の被害も深刻で、中でもニホンザルの野荒しの被害は各地に広がりをみせており、その実態、群れの分布について学生と共に広範にわたって調査された内容は興味深いものでした。

野荒しをするようになった原因について、植林の促進により、森林でのエサの確保が困難となった。農業従事者の変化、つまり農耕地にいる時間が少なく、出没しやすい状況にある。ハンターが少なく技術的にも駆除されにくい。自然保護思想の普及でサルを増長させている。放置作物が増えたなどいろいろな要素がからみ野荒しが増え、栄養も良好な為繁殖もさかんでさらに増殖する。といったようにその原因には人為的背景が強いようであり、地域と協力し、知恵をだしあって方策を練る必要があると……。

このように調査活動の中で得られた資料や情報を集積する情報センターとしての博物館の役割の必要性を述べられ、先生自身、調査研究で集積した標本資料を基に博物館を建設されたことも通して、博物館はその地域（地元）の資料の集収を先決とし、地域の人に喜ばれ、研究者とも結びついた有機的役割に期待されていました。地域博物館として足もとをみつめた活動の重要性を再認識した思いでした。

浜口哲一氏は平塚市博物館における市民参加の調査活動の実践例をとおして、博物館活動のあり方について講演されました。

はじめに地域環境の中で博物館の位置づけを明確にし、そこで博物館および館員のあるべき姿を追求していったということでした。平塚の場合、中央型でもなく、観光地型でもない地域型博物館を目指した。自分たちのくらす地域について身近なものでより深く知ることに主眼をおき、言わば放課後の博物館に徹し、日常的なところで活動する博物館づくりをしている、とのことでした。

博物館ならでは、学芸員ならではの活動を考えるとき、最近の博物館づくりの傾向として大規模化、財団化、教育委員会離れ（協会に所属しない）した館が増えている。展示は派手であるが、内容が充実していないところが多く、見世物的で集客が目的の感がある、地域情報の畜積、発信に地域博物館としての役割があるとして、最近の博物館ブームの中で博物館づくりのテーマの浅薄性、表層的な部分にのみ目をうばわれる一般的傾向を指摘されると共に、地域博物館の活動の方向を示す有意義な発表が続きました。

活動の有機的展開として「漂着物を拾う会」「カエル調査」「タンポポ調査」「神奈川県の植物誌」「セミのぬけがら調査」の調査活動を通して、博物館活動の組み方について具体的に説明されました。私たち博物館員にとって非常に刺激になるものでした。

地域に根ざした博物館は、人数ではなく質であり、結束が大切。何か知りたいことがあったとき、ちょっと出かけて見られる利用しやすい開かれた博物館でありたい。そうした館の中に派手な館があってもいいの

ではないだろうかと言われ、最後に博物館員の方の中には自らを雑芸員と愚痴をこぼす人もあるが、博物館は楽しいものであり、前向きに明るくとらえていきたいとしめくくられた言葉が印象的でした。

講演後希望者による園内見学を小寺園長の案内で実施していただきました。100種近くもいるサルたちの説明をされながらそれぞれの子ザルの誕生日も混じえて話される様子に彼らに対する愛情が伝わってくる思いでした。

以上つたない文章で、報告とはほど遠いものとなってしまいましたがご容赦下さい。この研修会に参加させて頂き、肌で感じた部分の多かったことに感謝しております。

平成２年度
愛知県博物館協会美術部門研修会報告

刈谷市美術館　学芸員　松本育子

平成２年度愛知県博物館協会美術部研修会が平成３年３月１日（金）名古屋市昭和区汐見町の昭和美術館において開催されました。今回初めて県外からの参加もあり、参加者48人という盛大な研修会となりました。その概要についてご報告いたします。

10：00～10：30	受付
10：30～10：35	開会あいさつ 愛知県博物館協会会長　亀井誠治氏
10：35～12：00	「世界に発言する日本美術」 講師　中村英樹氏（名古屋造形芸術大学教授）
12：00～13：00	昼食
13：00～14：30	「話し方について」 講師　矢橋　昇氏（元東海ラジオアナウンサー）
14：30～14：45	休憩
14：45～16：40	Ⅰ「光源について」 Ⅱ「美術館の展示照明について」 講師　大野幸男氏（㈱日立製作所青梅工場設計部主任技師）
16：40～16：45	閉会あいさつ
16：45～15：15	額の制作（実技）

中村氏の講義は、演題に加えて、氏が２月末にコミッショナーとして仕事をされた「第７回インド・トリエンナーレ*」のお話も交えた大変時宜を得た内容でした。

1980年以降、諸外国の日本への注目が高まりました。そのような中で、「国際社会における日本文化の位置」・「伝統美と現代美術との接点」が、問われてきました。前者に対しては、日本社会における文化の重要性について。後者については、伝統美と現代美術がどのようにつながっているのか、その答えが日本の中から出ていないということ。そして、近代美術と現代美術のつながりを説明されました。

インド・トリエンナーレについては、出品作家の北山善夫、白井美稲、福田美蘭の３氏（いずれも現代美術作家）の作品を中心に、インドをはじめ海外作家の作品のスライドを見せていただきました。また、北山氏の竹ひごや小さく切った和紙を使った作品、白井氏の日本の茶室を想わせる作品、福田氏の鋭く時代を見据えた作品、３氏それぞれの造形世界について語られ

ました。このトリエンナーレをインド政府は、国の統一を図るための文化政策としていること。また、日本に比べ、インドでは文化が政治・経済にも深く関わり、人間自身のアイデンティティーが重みをもっているのではないかと指摘されました。

再び、1970年代以降の日本文化について触れられました。日本文化は、1970年代の受容型文化から1980年代の発信型文化へと変化してきました。この例として、海外を受容しつくし、自分なりのスタイルを作り上げた葛飾北斎を挙げられました。

最後に人間の在り方が、西洋では自然と人間が独立しているのに対して、日本は自然そのものに絶対性が見出せずに、関わりによって自然や人間が成り立っている。そして、その関わりがとても大切である。だからこそ、私たちは、きちんと文脈をたてて、日本の作品を説明しなければならないと述べられました。日本国内外を問わず活躍していらっしゃる中村氏の熱意あふれるお話に、限られた時間の短さを感じました。

午後の第1の講義は、「話し方について」でした。矢橋氏は、長年ラジオのアナウンサーをされており、その経験を踏まえて、様々なエピソードを混え判り易くお話していただきました。

話をするにあたっては、まず意味を正しく捉えた正確な言葉を使うことが大切である。日本語は、尊敬語・謙譲語という敬語の使い方が大変難しい。いつも、お――と言葉の頭に「お」をつけるだけでなく、その場に合った敬語を使い分けるよう心掛けたい。日頃から敬語を使う時、戸惑うことが多い。今回は、いろいろな例を挙げて教えていただいたので、すぐに実践に生かせる内容でした。

美術館、博物館に勤務していると、性別、年齢を問わず、たくさんのお客様と直接お話する機会が多い。自館の展示などの解説がそうである。これに対して矢橋氏は、話す内容そのものが充分に聞く人々を引きつける魅力を持っている。その内容をきちんと整理し、段取をつけて、話をすることが必要である。話の基本は、話をする相手の立場に立って話すことであると述べられました。はきはきとした矢橋氏の語り口に、リラックスした気持でお話がうかがえました。

第3の講義は、美術館、博物館において作品を展示する上で欠かすことのできない「照明について」を参考資料、OHPの画面を使ってお話していただきました。

光束、光度など照明用語の解説のあと、蛍光ランプ、電球など光源の種類を実際の製品を前にして説明されました。

次に、さまざまな光源の中から美術館、博物館に適したものとして、作品の保存のため紫外線をカットし変色や退色を防止する紫外線防止構造を備えていること。そして、低照度が望ましく、色温度は演色AAAなど低い方が望ましいことを述べられました。実際、現場にいる者としてすぐに改良したいと思いますが、現在使用している製品との関連性や予算的なことが関わってくるため、ただちに実現するのは大変難しいのではないかと感じました。参加者からも直接作品保護に関わる問題のためか、具体的な質問が多く出されました。紫外線の正確、且つ簡単な測定の仕方や経費のこと、今後の商品開発の可能性など積極的な意見が交わされました。

最後は額の制作でした。額の板、ボンド、取り付け金具などを配っていただき、各々が完成した姿を思い

描きながら熱心に取り組んでいました。

以上、平成2年度愛知県博物館協会美術部門研修会の報告をさせていただきました。乱雑な文章となりましたことをご容赦下さい。

（注）

＊インド・トリエンナーレ（Triennale India）
インド国際美術トリエンナーレはニューデリーで、インド国立アカデミーの主催で行なわれるもので、1968年に開始された。

再開された学芸懇談会について

世話人　岩田洗心館　岩田正人

平成３年１月、学芸懇談会の第30回会合があり、23名の出席者を見ました。この「学芸懇談会」については、まる２年間も中断していたため初耳の方々も多数あるかとおもわれますので、その経緯と愛知県博物館協会（以下、愛博協と略記）におけるその位置について、以下に紹介します。

愛博協が急激に大きな組織となりはじめた昭和57、58年頃、その実行委員会において、愛博協が大きくなるとともに困難さをましてきました「博物館人相互の交流」を確保する方途についての論議がありました。愛博協創立当時加盟館園わずかに11館というところから、加盟館園たった17館で第15回全国博物館大会愛知大会（昭和42年６月）を成功させてきた諸先達のコトバだけに、「博物館界の発展の基礎は博物館人相互の交流にあり、愛博協はそのような場を確保すべき使命を負っている」という立論には重みがあります。加盟館園50館弱となって来た当時では、どこにどんな館園があるかということすら把握している人は少なく、ましてその全貌は覚束ないものでした。その職員が顔を合わせるわずかな機会である愛博協総会や三県交流会への出席者の多くは管理職の方々であり、研修会への出席者も毎回ほぼ同じ顔ぶれ、といった状態でした。

他方、当時、愛博協設立20周年を昭和59年１月にひかえて、その活動が一段と活潑になりはじめており、愛博協の全体像をよりよく理解したい、もっとしばしば博物館人が相集う機会をもちたい、という気運も強くなっていました。

しかし、愛博協の運営全体が、他館園よりは余裕があるのではないかと思われる――これはまったくの臆測でしかないのですが、当時は行政改革の嵐が吹き荒れていたのです――諸館園の御好意によってなされている状態では、これに更なる負担となるような仕事を新設することはできない。また、実をいえば、そのような「博物館人の集い」を愛博協が主催するとなれば、これは公式行事の扱いとなって、公立諸館園職員にとっては、これへの参加が自由にはゆかないものとなる、という可能性も指摘されたりして、その設定には継続審議となっていました。

しかし、①愛博協の主催行事としてではなく、②事務局の負担を可能なかぎり少なくするような方法で、③しかも、出席希望者が仕事とは一定独立したかたちで参加できる時間帯に、そのような機会を設定できるのであれば、主要な障害はなくなる、ということで、この学芸懇談会の骨子ができあがり、当時、実行委員のなかでは、もっともヒマそうで腰が軽くしかも自分のしたいとおもったことがホシイママにできる――と、おもわれていた――わたくしが、その世話人を拝命することとなりました。また、わたくしだけでは些か心許ないということで、当時若手注目株であった立松彰氏（東海市立平洲記念館）が同じく世話人として選任されました。早速、学芸懇談会の細部について２人で検討し、①愛博協の公式行事ではないのだから、参加資格は愛博協加盟館園職員以外でもよいこと、②内容はその都度ゆきあたりばったりに決めること、③会規・会費といったものは作らず、徴収しないことを原則とすること、④サロンをつくることが目的だからなにはなくとも定期的に、正規の労働時間外の時間帯で、開催すること、⑤愛博協には加盟館園への通知およびその経費以外、できる限り負担をおかけしないことを確認し、昭和58年11月29日、第１回の学芸懇談会を開催しました。

この第１回は、学芸職員のフリー・トーキングの形で行なわれましたが、その後は、だれかに話題提供をお願いし、会食をしながらそのお話を聞いたりしたあと、その話題をめぐって質疑応答・討論するという形になり、また話題はその後、場をかえて情報交換に及ぶ、という風な形式が定着しました。定期的に行なうということで、会合は原則として２ヶ月に１回、奇数月の第２乃至第３水曜日夜６時開催となっていました。参加費は、その時に掛る経費を参加者数（話題提供者をのぞき）で割勘するということにして、二次会まで含めても会費は5,000円程度に納まっていました。以上が、再開以前の様子です。

これまでとりあげてきた話題については、再開時の第30回参加者諸氏にその一覧表を配布して示しましたが、学芸職に共通する話題はほぼ網羅しているように思います。特に博物館における情報処理についての話題がかなり多数回にのぼっているのは、世話人の好みもあるが、時代の流れでもあるようにおもわれます。

会への参加が愛博協加盟館園職員に限られていないことは、この会の活動を豊かにしているといえましょう。再開後の２回はともに外部の方々（博物館関係者以外）による話題提供であり、その内容は内部人（博物館関係者）にとってすばらしい刺激になったことと思います。

再開後の参加者は、今までとは違って相当新しい人々に加わって頂き、再開後の実質的世話人の１人である尾坂知江子さん（名古屋市科学館）を筆頭にして、愛博協の新時代を形成してゆくのではないかと、隠退真近のわたくしは、秘かに喜んでいる次第です。

新規加盟館紹介

平成２年に当協会へ加盟されました館の概要を、ここに紹介します。

郷土資料館　温故倉（おんこぐら）

所在地　〒470―23　愛知県知多郡武豊町字里中78
　　電話（0569）72―0252

交　通　ＪＲ武豊駅または名鉄武豊駅より、徒歩15分

沿　革　温故知新から名付けられた温故倉は、昭和61年に江戸時代の蔵をイメージして造られたものです。
　　江戸時代から醤油が千石船で出荷されていた愛知県知多半島・武豊町にあって、尾張の徳川氏ともつながりがあり、古くは米屋を営んでいた泉万醸造が倉に眠っていた各種資料の有効活用を図ろうと公開したものです。

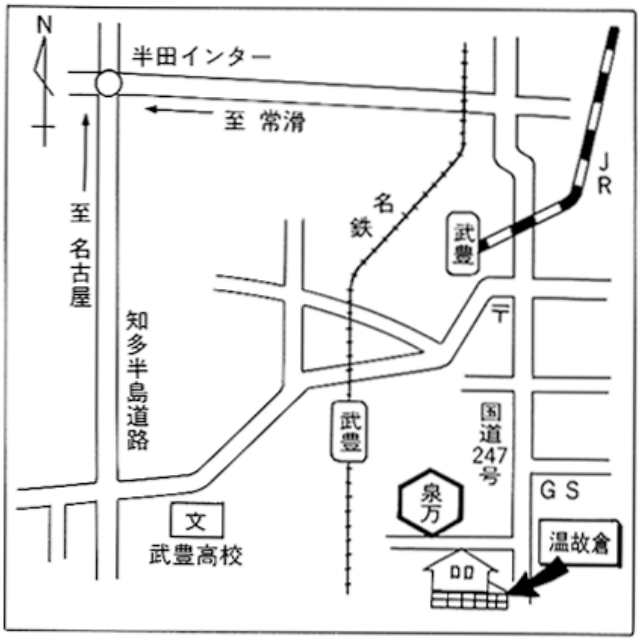
施　設　敷地　150㎡（ショールームと共用）
　　鉄筋コンクリート２階建（一部３階）
　　延面積　300㎡
　　展示室　２階　87.40㎡
　　展示室　３階　73.36㎡
　　その他（ショールーム）139.24㎡

開　館　９：00～17：00
　　休館日　日曜・祝祭日、第３土曜日

入館料　無料

特　色　■企業とともに歩んできた生活用具、醸造用具、古文書などが陳列してありますが、なかでも江戸時代に描かれたという日本地図や、名古屋城本丸と二の丸の設計図、明治24年の第一回衆議員証、同じく明治時代の普通植物図鑑など貴重な資料の展示や、江戸末期の英語の本という珍しい品まで並んでいます。
　　■１階ショールームでは、トルストイが一輪ざしに使ったという〝まぼろしの壺〟のレプリカが訪れる人の目をひいています。

案内図

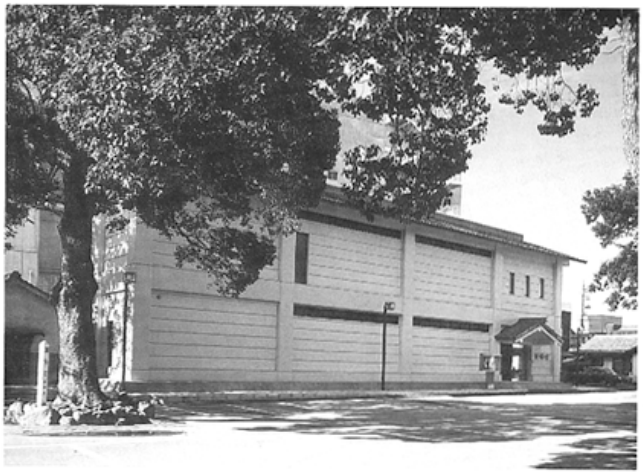


真清田神社宝物館

所在地　〒491　一宮市真清田１の２の１
　　電話（0586）73―5196

交　通　ＪＲ尾張一宮駅、名鉄線新一宮駅より徒歩10分

沿　革　神社のご神宝類は、一般に公開されることもなく、神社の土蔵に長く保存管理がなされておりましたが、氏子の中から是非多くの人々に展観出来る施設を建造して欲しいとの要望が強く、氏子崇敬者の浄財をもって、昭和62年に着工、平成元年５月、真清田神社宝物館としてオープンいたしました。

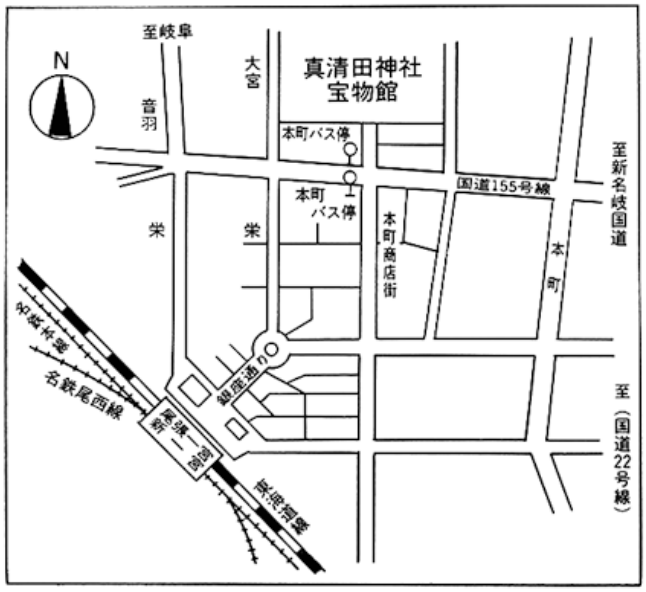


施　設　敷地
鉄筋コンクリート２階建、延面積491.90㎡
展示室　２室　317.2㎡
収蔵庫　78㎡
書庫、閲覧室　32.2㎡

開　館　土、日曜日、祝日
９：00～15：00
正月期間（１日～５日）桃花祭（４月１日～３日）は開館

入館料　大人200円、高大生150円、小中学生100円

特　色　１階は当神社の桃花祭に各町内から出される飾馬具26基を展示する。戦前は100基近くあったが、戦災でその多くを焼失した。祭に出されなくなった飾馬具の中には、嘉永年間に製作されたものもあり、往時の桃花祭の盛時を彷彿とさせる。
２階の展示室は重要文化財舞楽面、御膳台盤など神社の御神宝を随時展観する。



醸造『伝承館』

所在地　〒470―23　知多郡武豊町字小迎51番地
電話（0569）72―0030
ＦＡＸ（0569）72―0020

交　通　名鉄河知線知多武豊駅より徒歩約15分
ＪＲ武豊線武豊駅より徒歩約５分
知多中央道半田インターより車で約13分

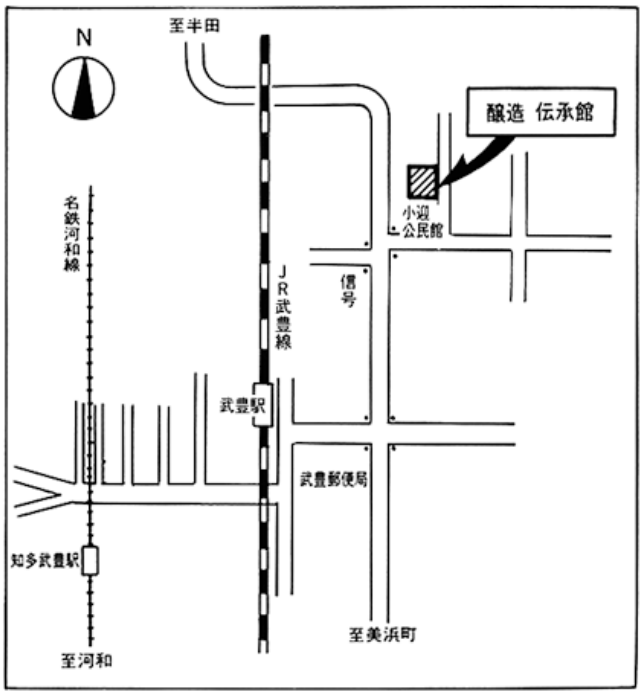
沿　革　日本三大銘醸地の一つに上げられる知多地方は、昔から醸造業と共に栄えました。
特に武豊は知多半島中央部に位置し、温暖な気候にめぐまれ港と鉄道を利用し、販路を拡大し、昭和の初期には味噌醤油の業者も、50軒余と隆盛を極めました。しかしその後、時代の変遷と共に大きく変りました。
(合)中定商店は明治12年の創業で、今日に至っております。
醸造『伝承館』は中定商店がオーナーで大正５年に建築した、通称大五蔵と呼ばれ、塩蔵として使用していた蔵の２階に昔の醸造用具や資料を展示し、醸造に関心を持って頂く様、昭和62年１月に開館致しました。

施　設　本造瓦葺延べ200㎡の２階に展示室を設けてあります。

開　館　９：30～17：00
休館日　日曜日、祝祭日、八月の旧盆、年末年始

入館料　無料

特　色　醸造道具類をじかにふれて確かめ、昔の書籍類も自由に閲覧し読む事ができます。また、別棟の『本蔵』（ほんぐら）では、自社製品の外自然食品や手づくり物を販売しております。



お　知　ら　せ

1．平成3年度愛知県博物館協会総会の開催について

総会を下記要項により開催しますので、ご案内致します。

㋑日時　平成3年5月22日(水)　13時30分より

㋺会場　ちからまち会館　名古屋市東区主税町4-47
052―932―3211

(交通)市バス―白壁町下車(基幹2号自由ケ丘行)
飯田町下車(143系統上飯田行)
名鉄バス―白壁下車(基幹バス4番
長久手・藤ケ丘等行)など

㋩日程

①総会

13時30分　受付

14時　会長・来賓挨拶、表彰、新規加盟館紹介

14時15分　議事

ⓐ平成2年度事業報告及び決算報告

ⓑ規約改正

ⓒ平成3年度事業計画及び予算案

ⓓ愛知県博物館協会発足30周年記念事業検討委員会の設置について

ⓔその他

15時15分　講演会

講師　栃木県立博物館
指導主事　清水昭二氏

演題　「栃木県立博物館における
普及教育活動
――学校教育とのかかわりあいを中心にして――」

16時45分　終了

㋥懇談会　17時～18時30分　立食パーティー形式
希望者のみ

2．表紙絵募集について

当協会では、協会報「愛知の博物館」(当紙)の表紙絵を募集します。当協会加盟館(園)の内で、収蔵品や展示概況、館の外形など特徴あるものの掲載の希望がありましたらご応募下さい。

①資格は当協会加盟館(園)に限ります。

②写真一枚(サービス版以上)

③タイトルとその説明文(250字前後)を付して下さい。(文責者名も明記)

④既に掲載された(採用)館(園)は応募出来ません。

⑤応募先及び問い合せは熱田神宮宝物館武田定雄まで。

⑥選定は実行委員会で行います。

⑦発表は掲載に替えます。

「愛知の博物館」No.53

発　行　日　平成3年4月30日

編集・発行　愛　知　県　博　物　館　協　会

〒489　愛知県瀬戸市南山口町234番地
愛知県陶磁資料館内

TEL〈0561〉　84―7474

FAX〈0561〉　84―4932